

インド社会を多角的にとらえる“眼”を



中島 岳志

北海道大学公共政策大学院法学部助教授

IT産業の勃興に象徴される目覚ましい経済発展を遂げるインドと、神秘的でスピリチュアルな魅惑に包まれたインド。両極端の側面を併せ持つ混沌とした現代のインドを、私たちはどうとらえればいいのか。 「先入観や一時的なブームに流されず、インド社会をじっくり多角的に見る眼が必要」と言う中島岳志さんは、現代南アジア研究の若き俊英として今、注目を集めている。

自ら現場の最前線に赴きインドのナシヨナリズムや日本のアジア主義について研究し、「インドで起きている出来事は、遠い国の話なんかじゃない。彼らの悩みは私たちの悩みと地続きにある」と語る中島さん。既成の研究やメディアによって構築された一面的なイメージを正しつつ、真に意義のある日本とインドの関係を説く。(続きは55ページ)

「“他者化”するのではなく、共通の真理を理解する姿勢が大切」

北海道大学公共政策大学院法学部助教授

中島 岳志

Nakajima Takeshi

1975年大阪府出身。99年大阪外国語大学(ヒンディー語専攻)卒業。2004年京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了。日本学術振興会特別研究員。京都大学人文科学研究所所員。06年10月から現職。05年『中村屋のボースインド独立運動と近代日本のアジア主義』(白水社)で大佛次郎論壇賞とアジア・太平洋賞「大賞」同時受賞。著書に『ヒンドゥー・ナショナリズム 印パ緊張の背景』(中公新書ラクレ)、『ナショナリズムと宗教 現代インドのヒンドゥー・ナショナリズム運動』(春風社)、『インドの時代 豊かさや苦悩の幕開け』(新潮社)など。



photos by Kamazawa Kyuya

私が初めてインドの土を踏んだのは、1999年のことです。経済自由化から8年が経過し、街には日本とインドの合併企業の自動車が走り、高級デパートにはジーンズにTシャツ姿の若者があふれていました。一方、90年代は民族の独立を訴えて度々暴動が起きたり、ヒンドゥーナショナリスト政権のBJP(インド人民党)が政権を握るなど、「ヒンドゥーナショナリズムの全盛期」といわれる時期でした。

同じころ、日本ではオウム真理教による地下鉄サリン事件や「新しい歴史教科書」問題など、バブル経済の熱狂の中で見過ごされてきた問題が浮き彫りになりました。当時、日本社会に息苦しさを感ずるとともに、インドには違う豊かさがあるはずという幻想を抱いていた私は「行くなら今だ」とインドに渡りました。大学院でナショナリズムを研究していた私は、過激なヒンドゥーナショナリズム運動を展開する政治結社RSS(民族奉仕団)を訪ね、メンバーたちと共同生活を始めました。彼らと寝食を共にするうちに驚いたのは、世間では残虐で危険といわれている青年たちの苦悩が、そのころ自分が感じていた悩みと似ていたことです。

彼らの多くは20代前半で、ある程度の学歴があって経済発展の恩恵を受けてきた層。大学を卒業してIT企業などに就職し裕福に暮らすという選択肢はあったはずで、でも、その道を選ばなかった。「そこに何の価値があるのだろう」と疑問を抱き、「もっと世の中のためにできることがあるに

違いない」と考えていたのです。

インドの都市で暮らす中産階級の若者たちは、現代社会の急速な変化に乗り遅れまいと全速力で疾走しつつ、それでは満たされない心の問題を抱えています。その原因の一つは、長い間カースト(身分制度)によって位置付けられていた強い共同体が、消費主義の浸透した都市生活によって変わりつつあることです。まさに戦後の日本と同じような状態です。「グローバルイゼーション」の名のもとに社会だけでなく、精神的なもので均質化しています。そういう視点から、インドと日本の関係を考えたいのです。

では、両国のために何ができるのか。それは、インドを“他者化”しないことだと思います。どんなに社会が異なっても、人がいかに生きるかという真理は同じはず。彼らを全く異なる人々と見るのではなく、自分の中に彼らと通じるものがあるということを知るべきです。

こうした精神は、国際援助の世界にもつながるのではないのでしょうか。うまくいかないプロセスの中で、うまくいったと思える瞬間があると思いますが、援助が成功したか否かは、指標化された数字だけではわかりません。もちろん「心が通じ合った」のみでは成果の証明にはなりません。もはや日本人もインド人も「本当の豊かさ=経済的な豊かさ」でないことは分かっていますよね。だからこそ、物質的な価値を超えた共通の真理を常に忘れず、個々人のコミュニケーションを密にしていくことが大切だと思います。

ヒンドゥー教徒にとっての宗教的価値の復興を説き、倫理規範や善、法などを意味する「ダルマ」の回復を主張。政治家・官僚などの汚職や、社会風紀の乱れに対して強い嫌悪感を持ち、宗教的倫理観の喪失を危惧する人たちの心を広くとらえている。